

昭和 47 年 3 月

秋田県文化財調査報告書第 24 集

東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書

(花輪町・尾去沢町・八幡平地区)

秋田県埋蔵文化財センター

秋田県教育委員会

序

東北縦貫自動車道が、本県の鹿角地区を通過することが決定し、すでに昭和44年度、小坂町、十和田町の両町にまたがる予定路線の分布調査を実施しましたが、本年はそれにつづく、花輪町、八幡平村、尾去沢町にわたる地域を巾4km、延長20kmの間の分布調査を実施しました。

今後はこの調査結果を参考にして、路線の決定へと、すすむわけですが、その間には発掘調査の実施も予定されており、その結果をまっけて、最終的に路線が決定するということとなります。

2次にわたる調査によって、一応本県の予定路線内の分布調査を終了することになりましたが、今後この遺跡の取扱いについては慎重を期する必要があります。

ともあれ、本書が、関係者の参考になれば幸いです。

おわりに、調査を担当された各調査員、ご協力いただいた花輪町、尾去沢町、八幡平村の方々に深甚の謝意を表する次第であります。

昭和47年3月

秋田県教育委員会

教育長 伊藤 忠二

凡 例

- 1 本報告書は秋田県教育委員会が主催し、調査刊行するものである。
- 2 現地調査は本文に記したように奥山潤が総括責任者となり、大里勝蔵、高橋昭悦、成田忠志、小山純夫によって実施された。
- 3 本文中の図は各調査員の記入原図により高橋昭悦が作成した分布図を主図とし、各調査員が採集した遺物の分類と取拓、拓影図の作成は奥山が担当した。
- 4 本文の報筆は、各調査員作成の調査カードにより奥山が執筆した。
- 5 写真は各調査員によるが、東在家の縄文晩期遺物の写真は県立十和田高校社会部による。
- 6 現場写真のNo.は、遺跡No.と一致する。
- 7 分布図の▲は今回調査の遺跡で、○は「館」または「チャン」と称される遺構である。
- 8 拓影のうち土師器は省略した。また第5図の諸図は十和田高校福原和虎教諭の原図を拝借した。拓影は特徴的なものだけを採用し、北部のこの地方通常の例は省略したものもある。
- 9 拓本No.はたとえば38とあれば、その段を右に次段へうつり、39にうつる。拓本No.は遺跡地点No.と一致する。

目 次

序

凡 例

I 調査団の編成と調査方針	1
II 調査区域内の遺跡分布状況	1
III 分布遺跡地点の概要	2
IV 総 括	5

図・図 版 目 次

第 1 図 調査区北半の段丘分布図	1
第 2 図 (1) 調査区北半の発見遺跡	8
〃 〃 (2) 調査区南半の発見遺跡	9
第 3 図 (1)~(8) 各地点採集遺物拓影	10
第 4 図 (1)~(6) 遺跡地点の写真	19
第 5 図 (1)~(3) 車在家遺跡出土遺物、遺構図	25

I 調査団の編成と調査方針

東北縦貫自動車道の幹線が本県を通貫する予定の路線は、鹿角郡内であり、昭和44年中は、その第1次分として、小坂町、十和田町区内の幅4km、延長25kmの予定通貫帯内の遺跡分布を調査した。

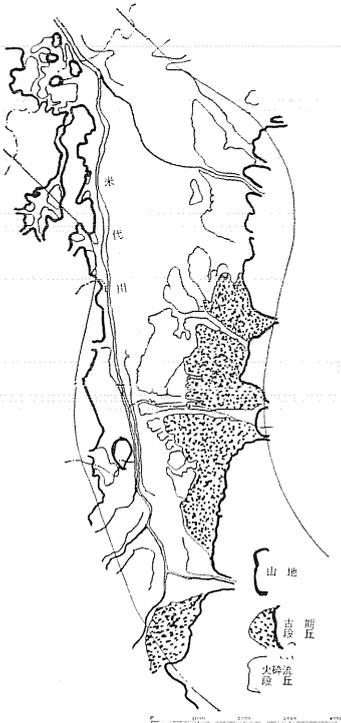
昭和46年夏は、第2次分として提示された、これに接続した花輪町、尾去沢町、八幡平村地区の幅4km延長20kmの間を調査することになり、初回とほぼ同じメンバーが調査を委嘱された。

調査員	大	里	勝	蔵
〃	高	橋	昭	悦
〃	小	山	純	夫
〃	成	田	忠	志
〃	奥	山	潤	(総括責任者)

調査といっても全く未知地区内の踏査であり、すべてが発見による分布地点の明示であるが、初回北部地区とはまた異なる地形的特徴をもっている地域であるため、この点を含み、前回同様、全域を数区に区別し、最初の数次の調査と全域の観察によって得た結果を分析して、調査区域を集約していった。

遺跡の分布は、全く立入らない地区に発見のないのは当然であるが、必ずしもこれだけによるものでなく、土層の厚さ、開発度、堆積の条件などの地形学的、地質学的条件による場合が多く、短期間の制約された条件下の報告結果をもって、遺跡存在の発見のない地点には遺跡が存在しないものとする認識は成立しない。

第1図 地区北半部の河岸段丘



これらのきわめて初歩的理解をふまえて、本報告書が、遺跡分布の地域的特色を伝えることができれば幸甚である。

II 調査区域内の遺跡分布の状況

今回の調査区域は、かなり著しい地形的特色を有する。

示された4kmの帯の北部、花輪町、尾去沢町地区は、米代川が地帯の両部を北に向って流れ、一部を除いて山地に接し、段丘の発達はほとんど東部にのみ見られる。

この段丘には特色があり、花輪町地区には火山碎屑物が構成する段丘が発達するが、その南と八幡平村の北部地域にはこの段丘に接し、わずか標高の高い位置に、南北の方向に風化した礫からなる段丘が発達し、これはさきの火砕流段丘より古期の段丘と見なされる。

(第1図)

花輪以北の米代川東域の低平地は、火砕流の第2次、3次堆積物が多いが、花輪町以南のV形の平地は八幡平方向から流れ降る熊取川や夜明島川が、米代川と合して堆積させた氾

濫原で、花輪以北の盆地底部とは異なった堆積を示し、これに東部からの小扇状地がところどころに見られる。

八幡平村地区にいたっては、ようやく道路とこれに沿う国鉄花輪線が通じるV字状の谷で、西側の山地の斜面はかならずしも急ではないが一様に崖錐状の地形で、黒土の発達さえ少なく、極めて特異であった。

遺跡の発見上、最も障害となった大湯浮石層は、ほぼ花輪町以北に留まるが、依然広域の遺跡をおおいかくして、その発見を妨げていることには変わらない。

これらの地学的特色のうちのあるものは、今回調査し得た遺跡の分布に明らかにその特性を示していることは一部うかがうことができる。

今回の調査区域は、この他、広域のりんご園地域を含み、その地域内での遺物の散布はほとんど見られない。また歴史時代の「館」の発達が著しい。

調査には各行政区内の1万分の地図を使用したのが、全域の航空写真を複写し使用し、その利用度は甚だ高かった。

また調査中、尾去沢東在家地区で、遺跡発見地点に建築が行われる個所がでてきたため、県立十和田高校社会部に御願して数日間の緊急発掘を実施した。

Ⅲ 分布遺跡地点の概要

第3図遺跡分布図に点示した各地点について、その概要を記録する。写真のNo.と、本文及び地図No.は一致する。

No. 1 続縄文期

段丘上の日当りのよい畑地。土器は小坂x式であるが、小坂x式は大湯浮石層下にあるのが普通。畑地は大湯浮石層を耕起しないので、遺跡はこの下にかくれているはず。

No. 2 縄文後期?

りんご園と神社わきのバレーコート脇に遺物が散布する。

No. 3 縄文晩期包含地

花輪西町西松寺の西裾の宅地及水田一帯。包含層の深度は地表下2m。水田は湿地を開田したもので低湿地遺跡の疑いがある。南の乳牛～小深田道路までの水田下は要注意。

No. 4 縄文土器、土師器

花輪乳牛より、営林署苗圃へ通じる道の2km地点(苗圃より500m)北側りんご園の一帯。土師器は内黒を含む。西に乳牛、鏡田方面が見渡せる。

No. 5 土師器・陶器(染付)

No. 4の苗圃の北東側は湿地で、北西は貯水池であるが、この湿地を含めて、北東の畑地が散布地である。古墳期、歴史期の複合遺跡として重要。

No. 6 縄文中期(円筒系)

附近一帯の畑地、りんご園。りんごの植替えの時に土石器、炭化粟などが出土している。(住民情報)

No. 7 縄文中～後期

上記に接続した地域であるが、縄文後期に及ぶ。

No. 8～11 縄文期

800m平方に点々と土器片が散在する。これより北の段丘三角地域一帯は遺跡である。標高160m、一面りんご園である。

No.12 館址・縄文中期

出土地点不明であるが情報による。付近に古館・木館・黒土館等の館址がある。

土石器の包含地はこの間にあり、他に歴史遺物として経塚出土と思われる一字一石が出土し、花輪図書館に一部が保存されている。

No.13 縄文中期

日向（ひなた）屋敷と称する地点にある。No.12地点と連続地区である。

No.14 縄文晩期・続縄文期

花輪町街より東に花輪鉱山へ行く道路を約2km、東山町営住宅の北側の狭い谷をへだてた舌状の台地である。150m×200mの開拓地内の大湯浮石層下に包含される。標高180～240m。住居址発見の可能性ある重要遺跡である。

No.15 続縄文期

花輪町東山町営住宅背面の区画整理された畑地一帯、標高約240m。区画整理によって攪乱されているうたがいがあ。自動車学校の道路向いである。

No.16 縄文

畑地に多くの細片が散乱。

No.17 縄文

スキー場へ行く道の分岐点附近、附近一帯の長径200mくらいの範囲に縄文後晩期と思われる遺物が多く見られる。開拓地である。

No.18

No.17と50mほど離れている。17よりは土器の散布が多い。No.17とも発掘すれば案外良好な遺跡かと推定される。

No.19 縄文、続縄文

花輪スキー場の北東、東山団地、自動車学校の南に当る。付近一帯の包含地の一部。

No.20 縄文

No.19の西150m、土器片の散乱が多い。次のNo.21の上段の台地である。

No.21

上記と一連の遺跡と考えられる。

No.22 縄文中期

花輪町スキー場に当る。ゲレンデの先端。ゲレンデ整地の際攪乱されている。一部の遺構等は破かいされていると見られる。

No.23 縄文後期

花輪町産土神集落より花輪スキー場へ向う道路の南側、やや西へ傾斜する舌状台地の中央部にある。附近に沢あり。或いは集落址の可能性もある。

No.24 縄文

甘露の切りくずした崖の下に散乱する。農地改善工事により消滅するおそれがある。

この甘露方面には遺物の情報は無いが更に多くの遺物を包含すると思われる。

No.25 古墳期

玉内部落より東に延びる沢に平行して広がる丘陵周囲の展望は広い。開拓地であるがその際堅穴の炉や煙道のようなものが発見されたという。広域にわたりきわめて重要な遺跡と考えられる。

No.26

玉内遺跡のある玉内部落より東へ葛岡へ通じる道路の北側の段丘。起状のゆるいなだらかな段丘である花輪高校が谷をへだてた対岸にある。住居址などの存在が予想される。

この段丘は、他の地点についても注意をそそぐ必要がある。なお花輪高校遺跡と云うべきものがあり、縄文中期の遺跡である。

No.27 縄文晩期

米代川対岸の玉内一帯の遺跡とともに、北の尾去沢方面から連続する遺跡の一部である。調査期間中、この一地点に建物が建てられることになり緊急発掘した。遺物は十和田高校社会部で整理、一部報告された。その要綱を本文に付録した。

No.28

館状地にあり、段丘の突端に位置する。りんご園の北側の畑中に2ヶ所ばかり遺物が散布する。

No.29

No.28に隣接する。館状地の上、両側が急斜面である。ボーリングの結果、住居址らしく思わせる。

No.30

No.28とは道路をへだてて東側の台地。広範囲に土器が散布している。

表面がたいらで径1mほどの大石や円礫や礫が積まれた部分があり、古墳址と考えられる。

No.31 館址

尾去38、67、53、41、47にわたる俗称金兵衛館といわれる。長泉寺の南西一帯である。

No.32

県道長内～尾去沢間の道路東側、バス停松谷のあるところから2～3m低くなっている。米代川岸でかつて、耕起の時灰や焼土、クルミ等が発見されたという。

No.33 古墳期

俗称笹森と呼ばれる古墳状の小丘の北東裾にある。

No.34 縄文・古墳期

大里部落北側の葛岡地区と接する丘陵地一帯である。

No.35

大里の大徳寺ウラにあり2、6、7、20、14の各番地にわたる。

No.36 a、b、c

No.35とは浅い谷をへだてた南東にあたり送電線の直下に当る。17、28、33各番地にあたり、りんご園以外の畑地にある。

No.37

大徳寺のある台地とは谷をへだて南側に当る。りんご園の周辺に遺物が発見される。

上記の、と共に「館」の一部でもある。

No.38

段丘端に位置し、眼下に歌内の集落がある。住居址の存在が推定できる。

No.39

大里部落より小豆沢に通じる道路を登りきった段丘にある。小扇状地状の地形である。送電線の電柱、No.145 No.146、が当地上を通る。下鷺巣75、76、78、71、77の各番地にわたる。

No.40

館の下段に当る。松谷集落のある舌状の台地の先端に当る。

道路新設に伴う法面に降下火山灰が見られる。組石の存在が考えられる。

No.41 館

通称館と言われる。南側及び東側は急斜面で、両側は人工による急斜面である。

No.42 縄文晩期

俗称二ツ森といわれ、孤立した小山の北東麓である。比高1.5mあり水田となる。深度40~50cmに礫あり住居址が考えられる。

No.43

盛岡、八幡平への三叉路を八幡平方面に300m。道路左側の低夷段丘である。

No.44 包含地

新城といわれる館への坂道途中にある。緩斜面、耕起によって多数の土器片散乱。豚舎を建てるため切った法面に包含層が現われている。(遺跡地名表256号に当るか。)

No.45 館

新城といわれるいわゆる長嶺城か。次のNo.46チャン状の館の北端に当る。この下段がNo.44である。

No.46 館・土師器

上記新城の南側の3個の空壕に切られた土塁で、ボーリングすると、各土塁の縁端に柵列があったことがわかる。

かつて多くの土師器を出土した。典型的な構造から貴重な遺跡といえる。

Ⅳ 総括

この報文は花輪町八幡平村と一部尾沢町内の米代川にそう、東北縦貫自動車道予定路線の20km間の先史遺

跡の分布調査の報告である。

今回の調査は、先回の予定路線北部地区の状態とちがって、古来文化の程度が高いと見なされている花輪盆地を中心とするもので、査調密度を高めたため、一部山地に調査の至らない地域が生じたことは、日数の関係とは言え少々遺憾である。

この種調査は、地図上に500mの方眼を設定し、綿密に行うべきものであるが、それができないまま打切った。

鹿角地方に於て最も注目すべき遺跡は、空濠により段丘を截り、独立の方型土塁を設けた「館」でありその古いものはエゾ全盛期の古墳時代から、安土桃山期まで各時代の館が、あるいは独立し、あるいは重複して存在することである。

段丘または低夷の山地の縁端には、これらの館が肩を並べて連なるほか、古墳期の集落址全般も、これに似た形態をとるようである。例えば花輪の館址とその東北側の段丘(No. 6～11の遺跡所在地)や柴内館や大里長嶺松館などすべてこれである。

分布上注目すべきは、花輪越から花輪市街に到る路線にそう遺跡の密集地、玉内と対岸尾去、東在家附近一帯に推定された縄文晩期の遺跡群などである。殊に花輪の東部から、尾去沢町の尾去地区に発展した続縄文式文化や、南下するに従って、古期段丘に発見される縄文早期末～前期中半の遺跡などである湯瀬の谷には、ほとんど生活に適した広い段丘がなく、ほぼ全域が崖錐状か崩壊地形で黒土層の発達をみない。しかしこの谷には当然洞穴の存在が考えられる。

夜明島川、米代川合流地点の氾濫原は水田面下に遺跡の存在する情報もあり、注意を要する。

花輪北部から八幡平北部にかけて、次第に縄文遺物の編年位置が古くなることは指摘したが、特に大湯式と呼ばれる縄文後期の土器が南部ほど少なくなることで、注目をひく。

また経塚の遺物、古墳の一部らしいものもあり、これらの密度が、鹿角盆地に於て高いことは当然考えられる常識的な判断である。

遺跡の一部には、早急に発掘しなければ消滅すると考えられるものもあり、更に大湯浮石層のほか他の降下浮石層と考えられるものが八幡平村にあることも、全域の遺跡が地表に露出する場合はますます妨げている。

従ってこの報告にだけ基づいて、縦貫道決定路線の事前発掘を実施するとせば、なお多くの貴重な遺跡が失われることは自明である。

考古学の研究とともに遺跡の保護を目的とする本調査団は、道路工事の着工前、幅員数十メートルの決定路線について再度の精密調査を実施することを要請する。

学術的興味と必要を略記するならば、館の編年分類によるエゾ文化解明にこの地区が果す役割は大きいし、土師器出現の直前に位置する続縄文期文化の開明には、花輪町東山地区遺跡が重大な意味を秘しているであろう。

縄文時代の前期初頭、早期文化は、おそらく古期段丘の遺跡に発見されるであろうし、この期以前の文化も明らかにされる可能性が出てきた。黒土層に限らず、古期段丘や火砕流段丘の上表の発掘には特に注意する必要がある。玉内一尾去付近の縄文晩期は、かなり大規模のものらしく、後期の様相もまた注意をひく。歴史考古遺跡の重大さは記すまでもなく、過去の各時代を通じ発見されるものにはわれわれの意外とするものが多いであろうことは推測に難くない。

東在家遺跡緊急発掘概報

県立十和田高校社会部

東在家地区に縄文晩期遺物が広い範囲で埋蔵されていることは周知の事実であり、今回発掘の遺跡も、分布調査によって発見されたものである。この概報は十和田高校社会部による中間報告（同校生徒会誌「山脈」20 昭47.3）の摘要である。

1. 発掘地点

尾去沢町尾去東在家（ひがしざけ）48番地、戸館美代松氏宅地の一部である。陸中花輪駅の南約2.2km。街道にそい、米代川畔にある。北側道傍には三光塚古墳群がある。

2. 包含層（第5図1）

地表から30cmは暗褐色土層で、第2層は15cmの黒色土層、第3層は15cmの褐色土層、第4層は10cmの大湯降下浮石層である。

包含層はこの15cmの黒土層（第5層）と15cmの褐色土層（第6層）である。以下は黄色ロームとなる。

3. 発掘

発掘ははじめA、B 2 トレンチにより、のち両トレンチ間を一部土層確認用の壁を残しながら拡張連絡した。発掘した面積はほぼ36平方メートルである。

4. 出土遺物（第5図2）

数点の定型品を含みかなりの量に達した。複元中であるが、C₂式を主体とし、C₁の新らしい方の土器も含む。

石器には石匙が多いが、磨製石斧、石棒片が出土しているが、凹石や錘石は見当たらない。

土製品としてはC₂式の岩版半欠品を得ているし、また土偶の半欠品もある。

5. 遺構（第5図3）

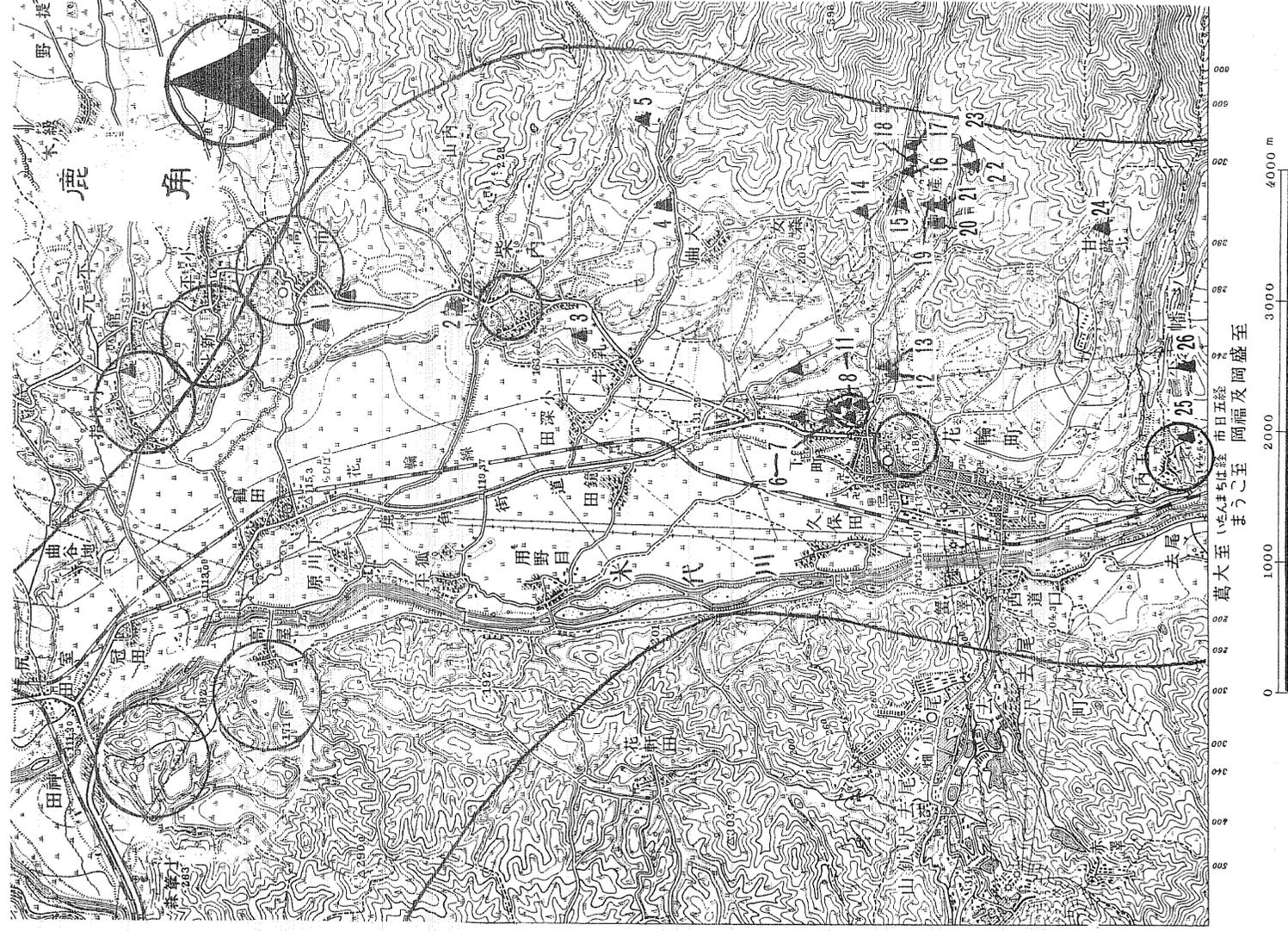
不規則で移動した石の多い石組もあるが、数期の浅い堅穴が発掘された。これらはいずれもローム中に堅穴住居址のように掘り込まれているが、その直径が小さい点で注目された。底床は平坦である。周辺や

- 内部に堀穴は発見されていないが、完掘に至らなかったので断定することはできない。

以上目下整理中で、土器類のセット、石器セットの組合わせ統計ができないので、この堅穴住居址的な遺構を含む遺跡の性格についての推定はできかねる。

この発掘は10月24、25日と28、29日にわたって実施され、遺物は十和田高校に保管され、遺構は埋戻しされた。なお附近一帯はかなり広い面積にわたる遺跡である。

第2図(1) 発見遺跡分布図

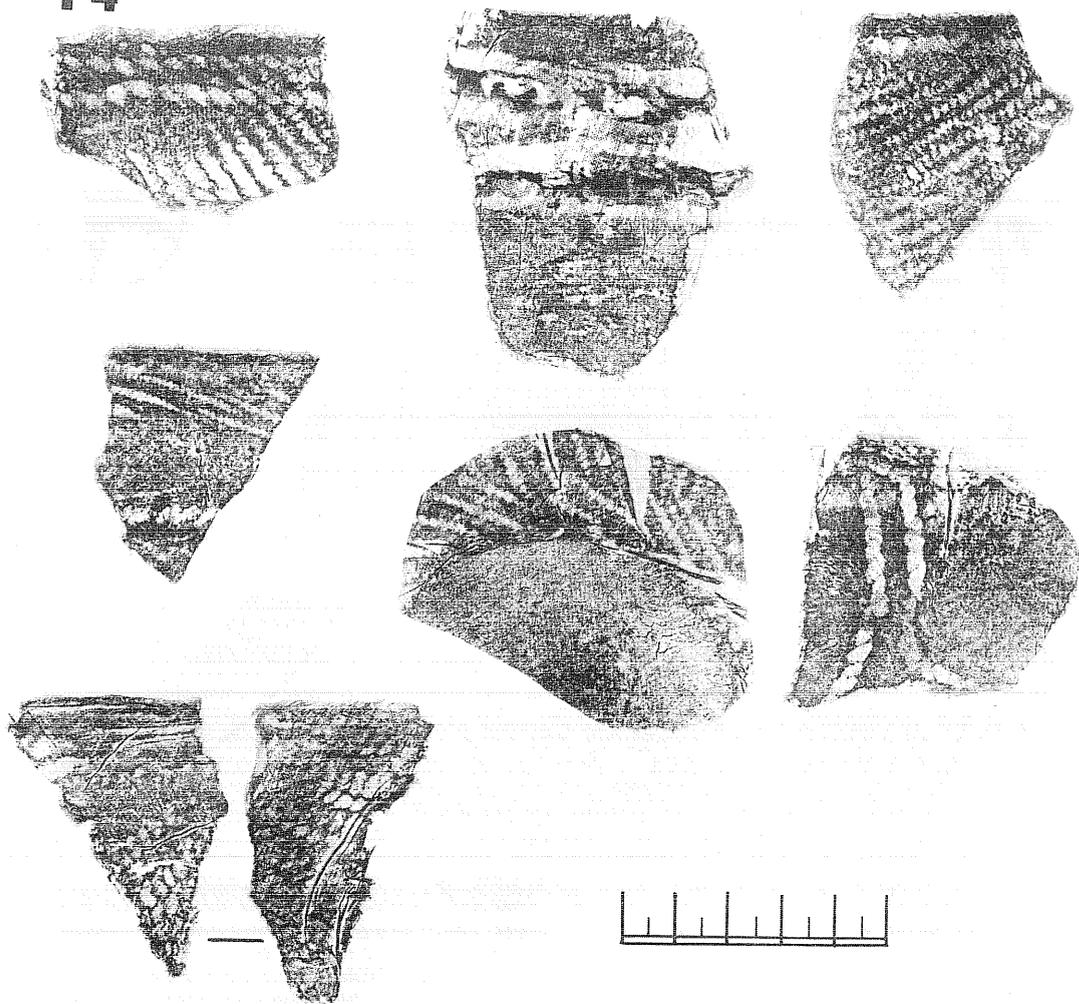


第2図(2) 発見遺跡分布図

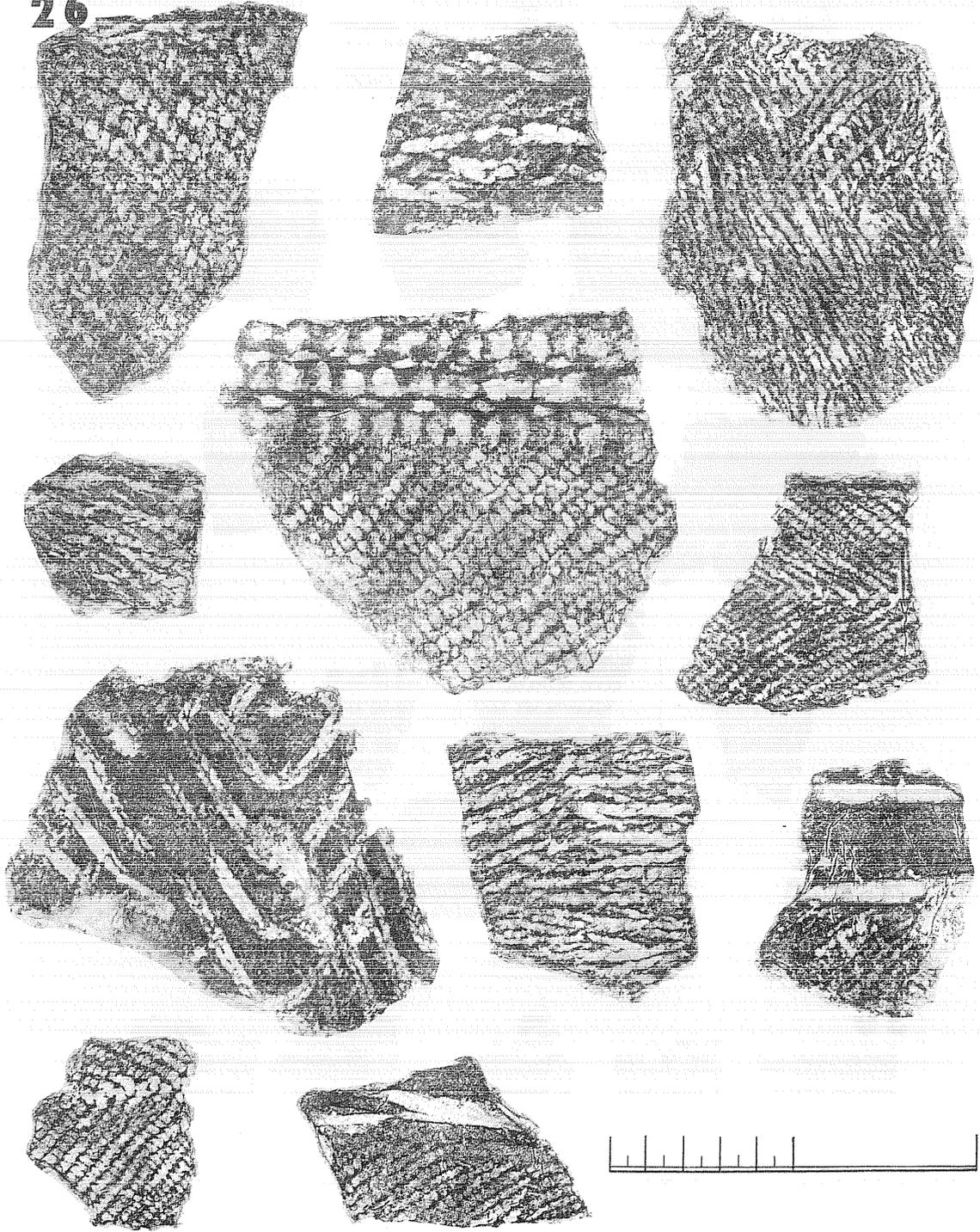


第3图(1)

14



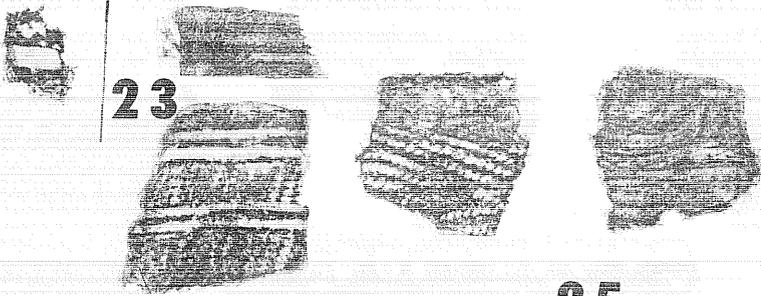
26



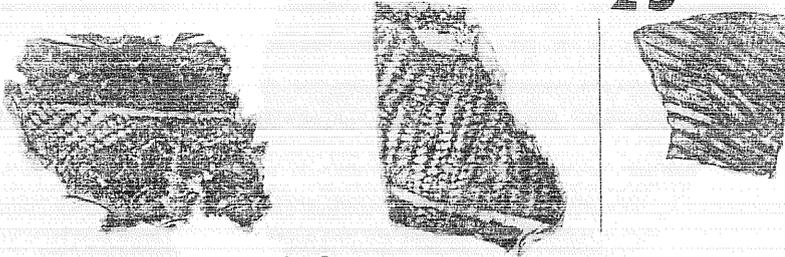
22



23



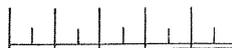
25



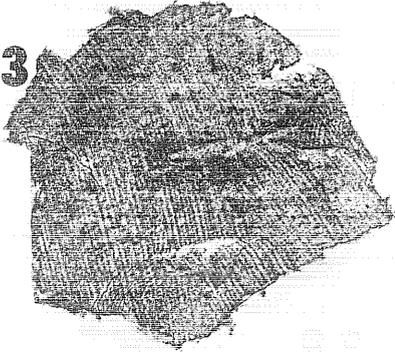
29



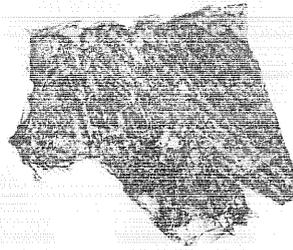
30



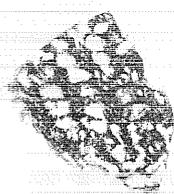
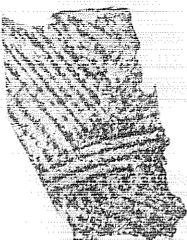
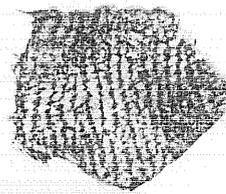
23



36



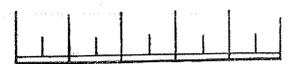
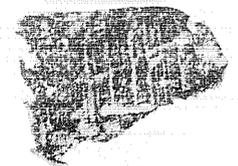
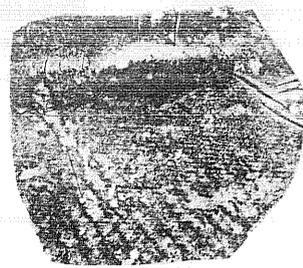
23

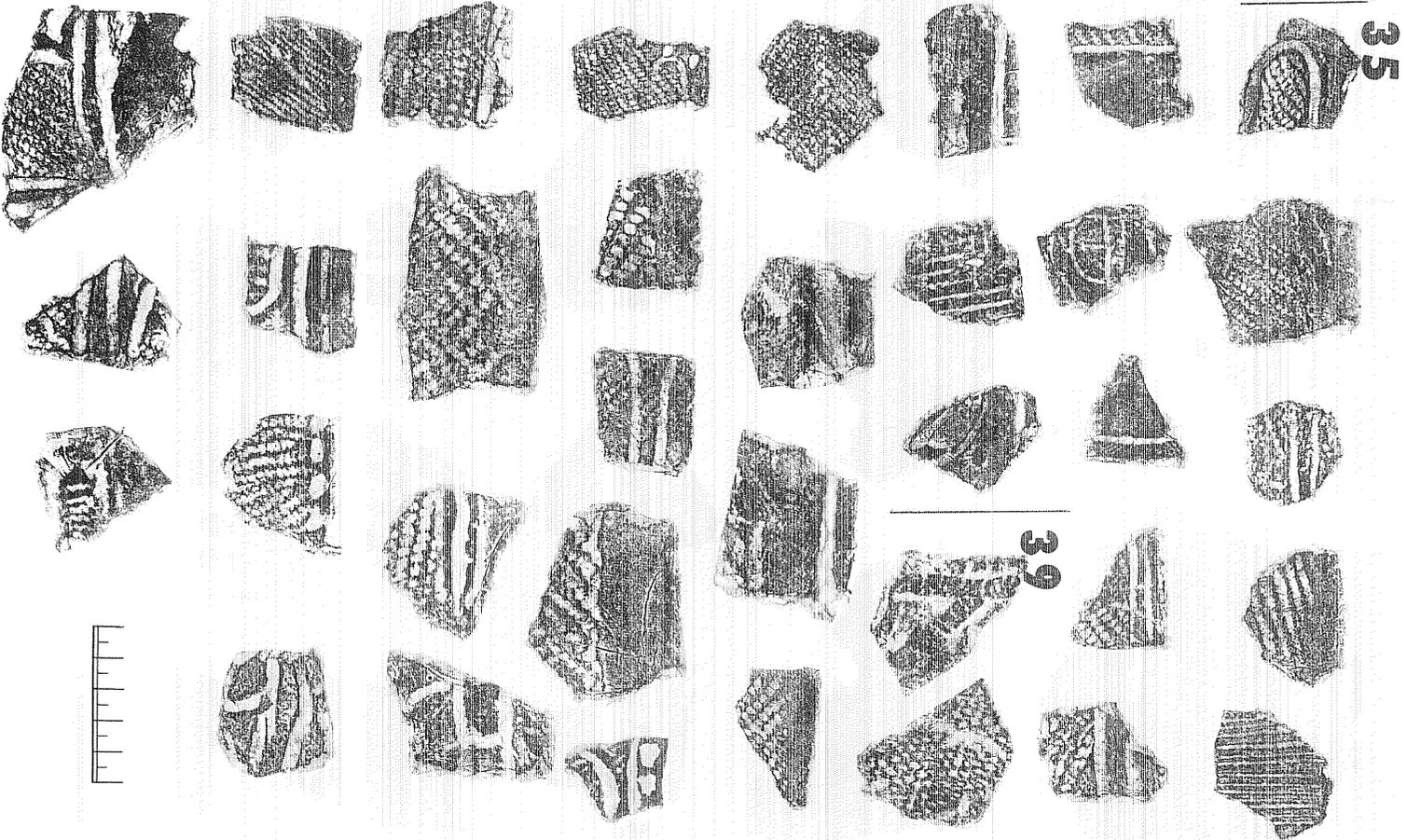


34



36





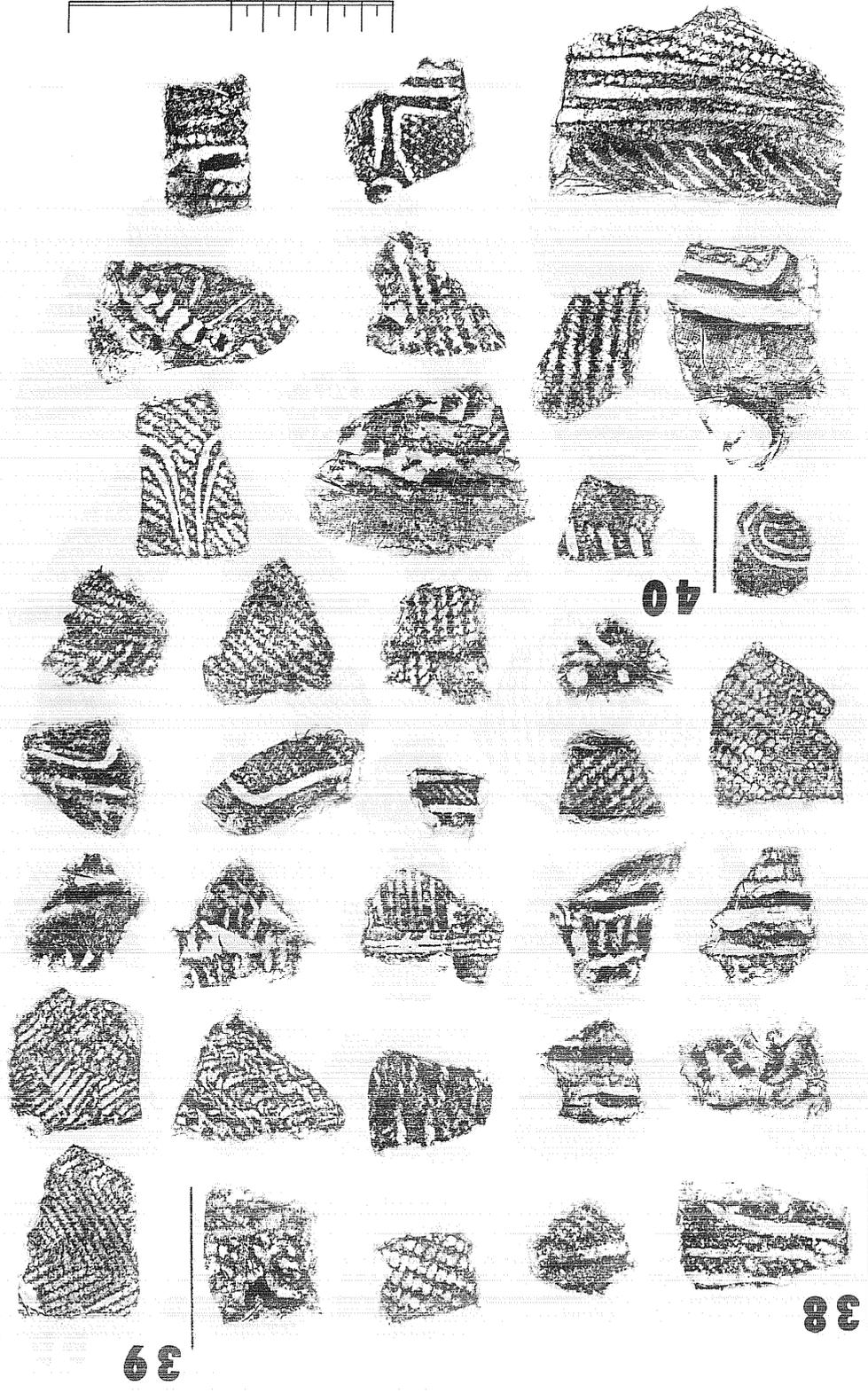
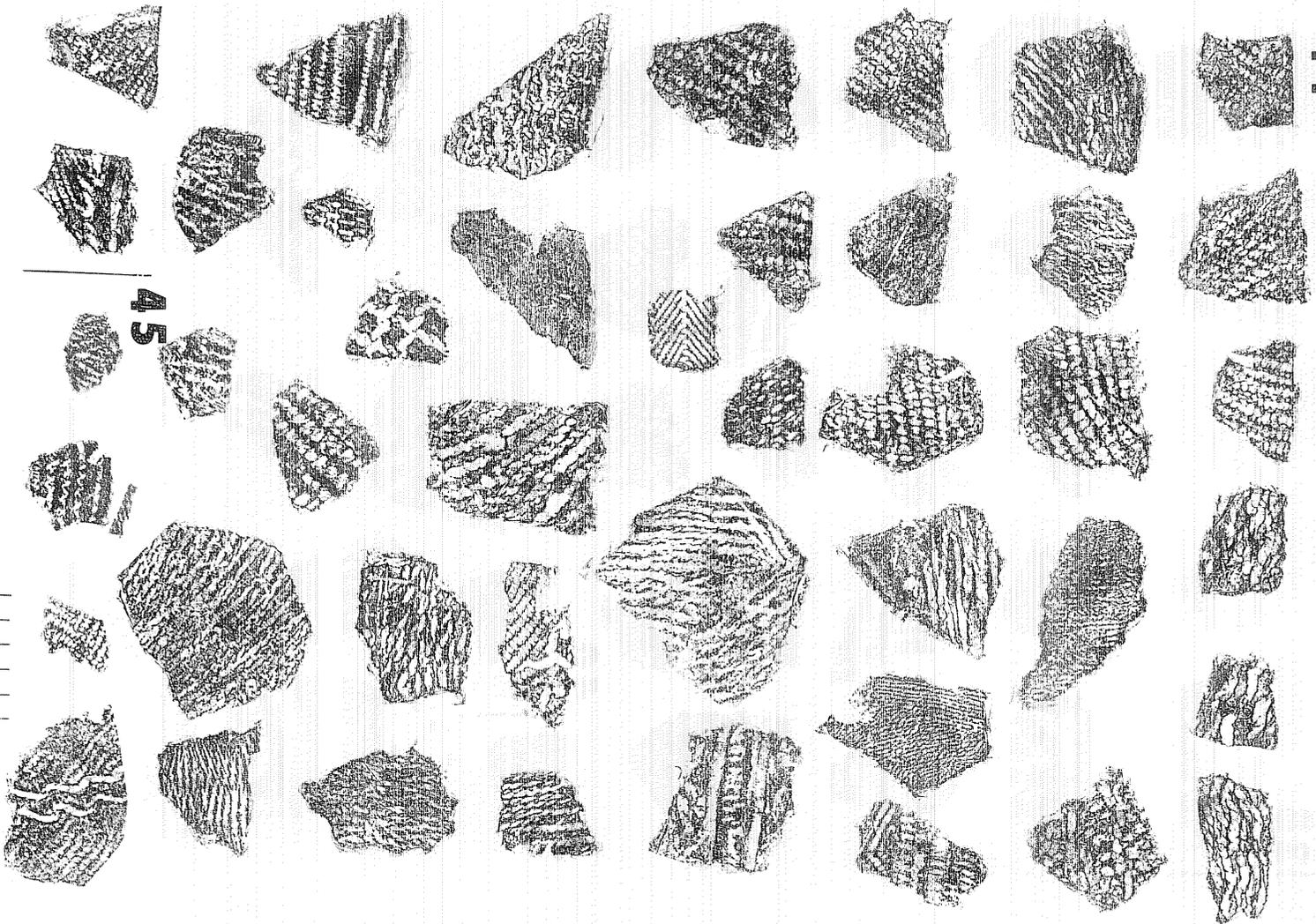


图 3 (6)

第 3 图 (7)

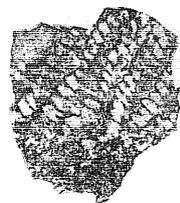
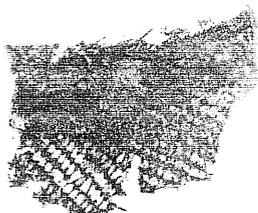
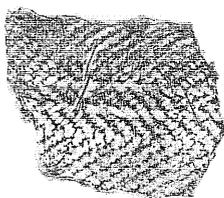
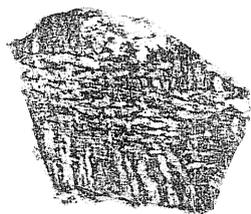
44



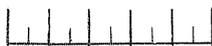
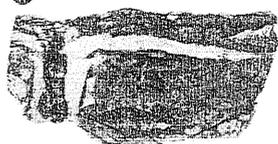
45

第3図(8)

45



46



第4図(1)

No. 1



No. 2



No. 2



No. 3



No. 8



No. 9



No. 11



No. 11



第4図(2)

No. 14



No. 16



No. 16



No. 17



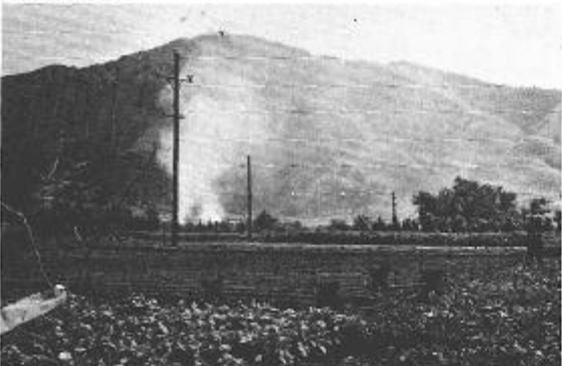
No. 17



No. 18



No. 18



No. 20



第4図(3)

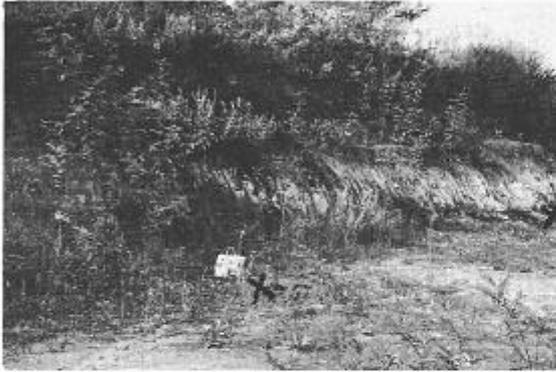
No. 20



No. 23



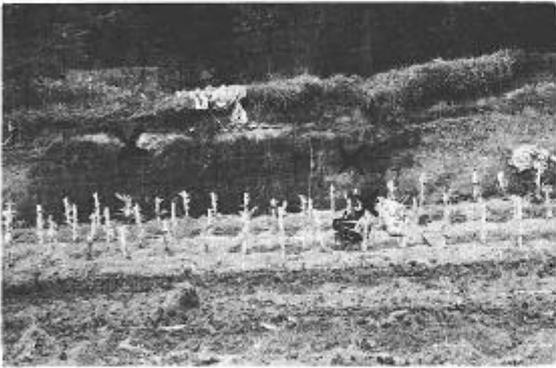
No. 26



No. 21



No. 24



No. 29

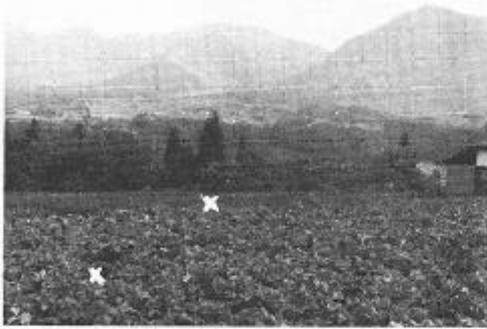


No. 26



第4図(4)

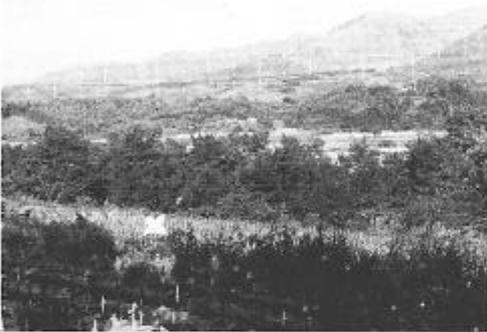
No. 30



No. 32



No. 32



No. 35



No. 36 a



No. 36 b



No. 38



No. 38



第4図(5)

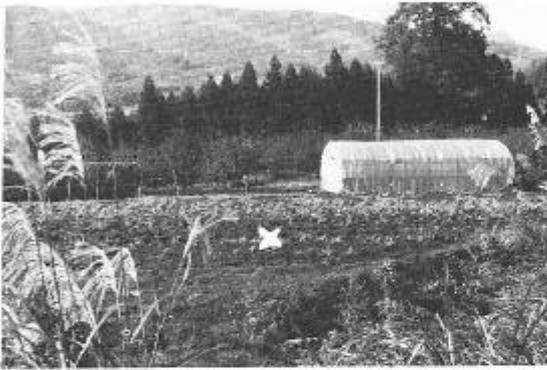
No. 38



No. 39



No. 39



No. 39



No. 41



No. 40

第4図(6)

No. 44



No. 45



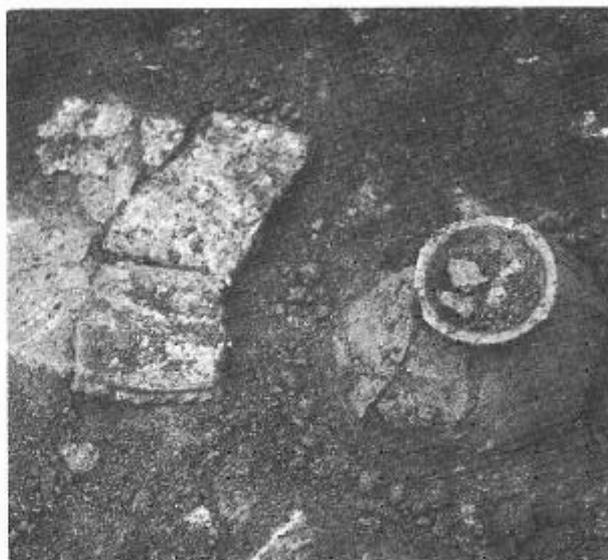
No. 45



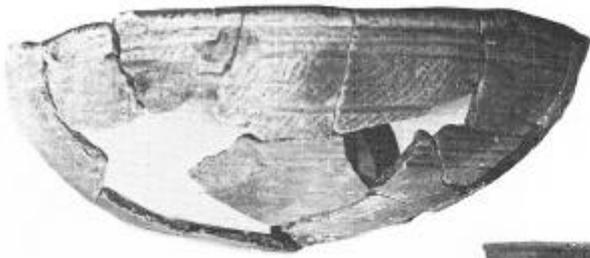
No. 45



第5図 (1) 左上 土層
右下 豎穴の一部



第5図(2) 出土土器の一部



(直径24.2cm)



(口径14.5cm・高さ12.4cm)



(口径12.7cm
高さ9.5cm)



(口径14.4cm・高さ14.2cm)



(口径11.6cm
高さ11cm)



(口径23cm 高さ27cm)



(口径9.3cm・高さ20cm)



(口径27cm・高さ33.4cm)



(直径17.8cm)



第5図(3)遺構(ピット)

